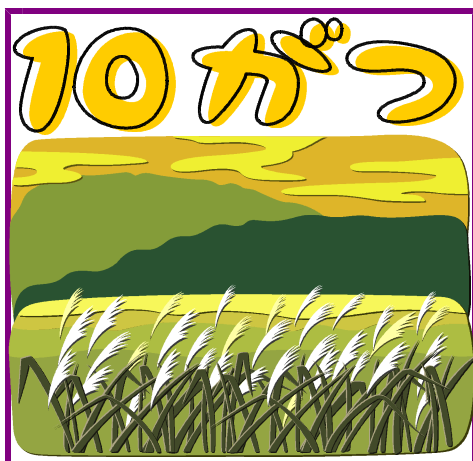


めぐみイエス・キリスト教会

2022年10月16日(日)第三主日礼拝
週報「通算第629号」



2022年標題聖句

第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】		
【賛美Ⅰ】	新聖歌21「輝く日を仰ぐとき」	p. 28
【交読文】	No.24 詩篇第67篇	p. 898
【賛美Ⅱ】	新聖歌320「世の波風に」	p. 508
【使徒信条】		
【主の祈り】		
【先週説教】		
【賛美Ⅲ】	オリジナル曲No.1「主の御前に」	
【聖書朗読】	使徒の働き20章7節～12節	
【礼拝説教】	《青年ユテコ》	
【聖餐式】		
【賛美Ⅳ】	新聖歌165「栄光イエスにあれ」	p. 235
【平和祈り】		
【頌 栄】	新聖歌63「父・御子・御霊の」	p. 85
【祝祷後奏】		

※聖書箇所 使徒の働き20章7節～12節(新約p. 276下段)

20:7 週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日に出発することになっていたのので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。

20:8 私たちが集まっていた屋上の間には、ともしびがたくさんついていた。

20:9 ユテコという名の一人の青年が、窓のところに腰掛けていたが、パウロの話が長く続くので、ひどく眠気がさし、とうとう眠り込んで三階から下に落ちてしまった。抱き起こしてみると、もう死んでいた。

20:10 しかし、パウロは降りて行って彼の上に身をかがめ、抱きかかえて、「心配することはない。まだいのちがあります」と言った。

20:11 そして、また上がって行ってパンを裂いて食べ、明け方まで長く語り合っ、それから出発した。

20:12 人々は生き返った青年を連れて帰り、ひとかたならず慰められた。

●ポイント1.「週の初めの日に、パンを裂く為に集まった」とは？

※第 I コリント11章23節～26節「パウロの勧めと理解」(新約p.343下段)

11:23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、

11:24 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

11:25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

●ポイント2.「語り合い」とは？

■ホミーレサス このギリシャ語原語から後にラテン語で、説教のことを「ホミア」と言い、それから英語になった「ホミレティックス」、すなわち説教と言う言葉の語源ともなっている。よって、「語り合い」とは「説教」のことである。このことによってパウロは、決別説教をしていることが分かる。

※使徒の働き20章1節「パウロがエペソを去る時に」 (新約p.276上段)

20:1 騒ぎが収まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ、マケドニアに向けて出発した。

●ポイント3.「彼の上に身をかがめた」とは？

※第 I 列王記17章17節～24節「エリヤとやもめの息子」(旧約p.632上段)

◎先週の礼拝メッセージ【エペソからコリントへ】

《銀細工人デメテリオによる騒乱が切っ掛けとなり、パウロはエペソを離れることを決意します。その時、弟子たちを呼び集めて、励ましたとあります。それでは、具体的にパウロは何を語ったのでしょうか。聖書には、詳しくその事については書かれてはいませんが、真の神様の言葉である「主イエスが語られた言葉と教え」ではないでしょうか。

主は弟子たちに言われました。『「あなたがたが聞いている言葉は、私のものではなく、私を遣わされた父のものです。』』と。

さて、マケドニアを経て、パウロはギリシャ(アカヤ州)の首都コリントに向かいます。コリント教会の問題を解決するためにです。また、多くの兄弟たちと共にコリントを訪れることになったのは、エルサレム教会の欠乏と困窮を救う献金を集めるためでもありました。

さて、コリント教会の問題も一段落し、コリントの港町ケンクレアから、シリアに向けて船出しようとしていた時のことです。パウロに対するユダヤ人の陰謀が発覚したため、パウロは来た道を引き返して、陸路を経て、マケドニア経由で帰ることにしました。

その時パウロは、一緒にコリント教会を共に訪れた、マケドニアと他の教会の指導者たちを、ケンクレアから先に船でトロアスに行かせ、パウロとルカは、陸路を通って、トロアスで落ち合うことにしたのです。

トロアスとは、小アジアの北西部ムシヤ地方のエーゲ海に面する港町で、パウロは第2回伝道旅行中、この地でマケドニヤ人の幻を見たのでした。パウロとルカは、種なしパンの祭りの後にピリピから船出して、トロアスに向かい、五日のうちに、彼らと合流し、トロアスで七日間滞在したのです。彼らはパウロと共に、エルサレムまで同行し、直接エルサレム教会に「愛の捧げ物」を届けることになるのです。》

お知らせ

※10月23日(日)の礼拝は、通常通りです。10月30日(日)第五主日礼拝は、今年最後の特別メッセージとなります。なお11月6日(日)の第一主日礼拝は、牧師の都合によりお休みとなります。ご注意ください。